

論文の和文要旨

論文題目	デゲマ語のクリティック： 音韻論、形態論、統語論の合流点
氏名	カリ、エセルベト イマヌエル

本論文は、ニジェール・コンゴ系デルタ・エドイド・グループに属す言語であるナイジェリアのデゲマ語のクリティック（接語）について、その詳細な記述を提供するものである。デゲマ語においてクリティックとは、音韻論、形態論、統語論、意味論のみならず、語用論を含む様々な文法記述のレベルが集中して現れる場である。

デゲマ語の話者はおよそ2万2000人で、彼らはナイジェリアのリバース州デゲマ自治区にある2つの自治コミュニティ、ウソクン・デゲマとデゲマ・タウンとに居住している。どちらのコミュニティも、他方と相互に意思疎通可能なデゲマ語の変種を話している。本論分で対象とするのはウソクン・デゲマ方言である。

第1章では、デゲマの人々の歴史的背景とデゲマ語に関する初期の記述や、クリティックについての議論などを簡略に示す。ここで、デゲマという名称が、上述の2つのデゲマ語話者コミュニティの片方のみを排他的に指すのではなく、双方を示すことを指摘する。また、デゲマ語をアタラあるいはウデカーマと呼ぶのは誤りであることも示す。アタラはデゲマ・タウンの人々の話す方言の土着の名称であり、他方、ウデカーマはウソクン・デゲマとデゲマ・タウンという、2つのデゲマ語コミュニティを包括するクランの名前である。

第2章では、デゲマ語文法のいくつかの側面を論ずる。これは、デゲマ語のクリティックに関する議論に、直接関連するものである。ここで論じられる文法的側面とは、以下の3つである。

- ①音韻論：母音、母音調和、子音、声調、音節型について論じる。
- ②形態論：主として名詞および動詞の形態論を考察する。とりわけ名詞クラスの接頭辞や文法性、動詞の拡張、動詞から派生し修飾語としての機能を持つ名詞類の形態論に焦点を絞って検討する。
- ③統語論：助動詞、代名詞、副詞について考察する。

第3章の考察対象は以下の3点である。

①クリティックの類型論。

②クリティックを切り離す際の、実際の・理論的問題（これはクリティックが明確な独立語でも明確な接辞でもないため）。

③基底部生成（base-generation）、コピー（copying）、クリティック上昇（climbing）やクリティック重複（doubling）などの諸クリティック現象。

本章は、これらのうち、どの現象がデゲマ語の接辞を特徴づけるものであるか、判断するための情報を供する。また、この議論は、デゲマ語の接辞が、今まで注目を集めてきたロマンス諸語やスラブ諸語のクリティックとどのような面で類似しているか、あるいは異なっているかということも明らかにする。

第4章では、デゲマ語のクリティックの起源を検討する。一般に唱えられているのは、自由語彙項目やアクセントを伴わないで現れる統語的カテゴリーから、クリティックが発展したという説である。これに対し、本章では、デゲマ語のクリティックはそのような自由語彙項目や統語カテゴリーからではなく、デゲマ語のかつて接辞から発展したことを論証する。

次いで、クリティックによっては、かつての独立語から中間的なクリティック段階を経て発展してきた可能性のあること、また逆に、独立的な要素も、かつての接辞から中間的なクリティック段階を経て発展してきた可能性のあることを論じる。

第5章では、デゲマ語学に関する文献で記述されてきた、クリティックの2つのタイプを論ずる。その2つのタイプとは、主語クリティック（前接クリティック）と非主語クリティック（後接クリティック）である。主語クリティックが、（主）動詞、助動詞、動詞の前に来る副詞に付与されるのに対し、非主格クリティックは、動詞と、CVV(C)という音韻構造を持つ他動詞目的語代名詞とに付与される。

また、表層的な内接クリティックについても、ここで考察する。デゲマ語における内接クリティック化は、クリティックは常に接辞の外側に付与されるという仮説に対する反証となる。

次いで、クリティックと、時制・相・法のカテゴリーとの間の相互関係をやや詳しく論じる。主語クリティックは、過去か非過去か、肯定文か否定文かによって形が変化する。特に、ほとんどの場合、V形の主語クリティックは過去の否定文、mV形の主語クリティックは非過去の肯定文に現れることを述べる。また、デゲマ語におけるクリティック重複は、ロマンス諸語のような前置詞の存在によるものでも、スラブ諸語のようなトピック性や特定性によるものでもなく、照応性、強調、および／あるいは親密性によって特徴付けられるものであることを明らかにする。

第6章では、屈折・派生と語に接辞やクリティックが付いた場合との違いを検討する。デゲマ語における屈折と派生の間には、グレー・ゾーンが存在するものの、両者は、統語論と生産性という基準ではっきり区別される。さらに、デゲマ語のクリティックは、語とは異なることが論証される。クリティックは、また、通時的な起源を同じくするにもかかわらず、接辞とは異なっている。

デゲマ語を分析した結論として言えることのひとつは、クリティックと接辞の区別は、いくつかの言語においては、言語内的事実（デゲマ語で言えば、声調のパターン）に通言語的基準を組み合わせるべきだということである。これらの要素を通言語的基準のみに基づいて分析すると、言語によってはクリティックと接辞との区別が妥当にできない可能性がある。

第7章では、デゲマ語の（主語）クリティックが、深層構造での動詞句内の位置から指定部（specifier）の位置へすなわち、そのクリティックが主語の特性をコピーすることが可能になる、主語と並列の位置へ移動してきた場合、実際の構成素そのものではなく、主語の文法的特性に対応した形式となることを明らかにする。

また、デゲマ語の主語クリティックが第2の位置に置かれるのは、クリティックの移動のためではなく、主語である名詞句の移動一つまり、主語の名詞句を文頭の位置に置く（そのため、主語クリティックは、主語の名詞句の次の位置、すなわち文頭から2番目の位置に送られることになる）統語的操作一のためであることも示す。

第8章では、デゲマ語のクリティックを、クラバンの5つのパラメータ（①クリティックの同定、②クリティック化の領域、③初頭／末尾、④前／後、⑤後接クリティック／前接クリティック）に照らして考察する。そして、クラバンのパラメータ、特に、クリティック化の適切な定義付けと領域構築とから得られる③～⑤のパラメータが、デゲマ語のクリティックを正確に予測するものであることが明らかとなる。すなわち、

1. デゲマ語のクリティック要素は、語彙素性 [+CL] によってマークされる。つまりクリティック素性を持ちクリティック化規則の正しい適用を受ける（パラメータ①）。
2. デゲマ語のクリティック化領域は、主語クリティックおよび非主語クリティックが表層構造でホストに付くところである AGR' (agreement-bar) として構築される（パラメータ②）。
3. クリティック化領域のもとでは、主語クリティックが構成素の最初の語に付くのに対し、非主語クリティックは末尾の語に付く（パラメータ③）。
4. クリティック化領域のもとでは、主語クリティックがそのホストの前に付くのに対し、非主語クリティックはホストの後ろに付く（パラメータ④）。
5. 主語クリティックは前接クリティックとして現れ、非主語クリティックは後接クリティックとして現れる（パラメータ⑤）。

最後に、第9章では、形態論的なパラダイムの一貫性と同一性に加え、旧情報・新情報という対立に関連する語用論的な要因もまた、デゲマ語において、テーマ的な主語が抑制されるかどうかを決定していることを示す。テーマ的な主語が新情報を担う場合、つまり焦点化され、対比的で、強調された主語は、抑制されたり省略されたりしないのに対して、旧情報、すなわち焦点化されず、対比的でなく、また強調されていないものは抑制されたり省略されるのである。

このことから、統語論と語用論とが、デゲマ語のテーマ的な主語の抑制に関して相互に作用すると、結論付けられる。さらに、自由倒置とテーマ的な空主語とは、互いに独立した現象であるという主張が、デゲマ語の分析データからも支持される。

以上が本論文の要旨である。このように、本論文では、デゲマ語のクリティックに関して、音韻論、形態論、統語論、語用論という、異なる文法記述レベルを踏まえた総合的な観点から記述し、生成文法の理論との整合性についても検討を加えた。デゲマ語という先行研究の非常に少ない言語の文法記述は、危機言語の記録・保存という点から必要であるのみならず、一般言語学理論の研究にも貢献するものと考えられる。